〈今までありそうでなかった循環コードパターンを用いた方法〉

私たちは、音楽活動の際ずいぶん歌謡曲のお世話になっていることと思われます。しかし、ポップスや歌謡曲でお決まりのパターンとして用いられる“循環コード”が今まで音楽活動の即興技法として一般的に応用されなかったことを筆者は不思議に思います。同時にこのことは、多くはクラシック音楽をベースとしてピアノ（音楽）を習得された音楽家（実践家）の方々にとってコード（和音・和声）進行の響きのなかで自由に右手で音を探すといったトレーニングの機会があまりなかったという事なのかもしれません。筆者の場合、学生時代からギターを弾きながら歌を作るということをずっとしてきたため、逆にコードの響きのなかで旋律を見つけようとする行為は生活の一部にありました。実際、活動において対象者の方々と本法を施行していくなかで「これは使える、繰り返しに耐え面白い」また「このくらいの伴奏ならピアノコードが弾ければ誰でもできるじゃん」という実感を深めるに至りました。

さて、それではコードパターンについて一緒に考えていきましょう。昨今のバンドブーム（古い言い方かな）もあり、楽器を自らで演奏する行為は昔に比べればずいぶんと身近になりました。楽器店へ行けばミュージシャンの楽譜は所狭しと並んでおり、ギターを弾いている中学生に「Ｃmaj7のコードは？」という質問をすれば「ド・ミ・ソ・シでしょ」などという答えはもはや朝飯前の常識と化しています。循環コードという概念も同様で古くは昭和歌謡から今をときめくミスチルや宇多田ヒカルまで、商業音楽の全てが循環コードパターンから成り立っているといっても過言ではありません。何故でしょうか？答えは簡単“分かりやすく心地良い”からです。当然これは日本に限ったことではなく、ほぼ全世界の商業音楽は循環コードがベースとなっています。むしろ関心は“どんなに格好良いコードパターンを作るか”ということが課題になっています。具体的には、9th、11thや13 thなどのテンションノートをどう絡ませてパターンを作るか、またＣ→Ａｍ→Ｆ→Ｇ、といった昔風の進行パターンをどうやって脱却できるかがテーマになっていたりします。また、ベース音（分数コード）やリズムを工夫したりと現代の流行歌は大人たちの想像を遥かに超えて複雑化し進化しています。我々音楽療法家も指をくわえて見ているわけにはいきません。毎月発売される歌本を見ればお解かりと思いますが、ジャニーズ系の歌だってそれっぽく伴奏するのは至難の技といえます。

しかし、（循環）コードパターンは実はそんなに手ごわいものではないのです。どんなに複雑にみえるコード進行も多くはいくつかのパターンから派生したものと捉える事ができます。本誌に３０のパターンを示していますが、たとえば皆さんがよく知っているサザンオールスターズやユーミンの楽曲の半数以上はこれらのパターンが一部使用されているといっても良いと思います。ただし、ここで重要なのは対人援助を目的とした音楽活動における“循環コードパターン”という位置付けは、“楽曲を作る”という事とは異なりますので、ある程度限られた時間（小節）のなかで起承転

結をクライアントと共有できる工夫が重要だと思われます。そのためには、①調性を揃える事（途中での極端な転調は控える、瞬間的転調感は可）、②最初の４小節位で予測性を持てるように導く、③ワンコードで３小節以上引っ張らない、④ある程度素直に次の展開を提示する（奇をてらい過ぎない）、ということがポイントになるでしょう。

パターンは、セラピストのセンスにより考えていけばもっとたくさん存在しますし、このセッションに慣れてくれば、派生音（黒鍵）を用いた展開も可能でしょうし、逆にコード進行の中に、非ダイアトニックコードなどを用いて“ずれた感じ・ねじれた感じーー時的転調感”を提供する事も出来ようかとも思います。たとえば、Ｃ(ハ長)調もしくはＡｍ(イ短)調の中にＤ(7)、Ｇｍ(7)、Ｂ♭、Ｂｍをスパイスとして用いる事も可能でしょう。このことが後に述べるモードやスケールも視野に入れながらコードパターンに繋がります。例えばパターン１１-①に示したＦmaj7⇒Ｇ/Ｆではファを抜いた幹音での展開、パターン１８に示したミクソリディアンモーション（Ｃ⇒Ｂ♭）ではシを抜いた展開などがやり易いと思います。先のペンタトニックにも関連しますが、白鍵主体の当パターンにおいては、その多くがファ、シ抜きにするとあまり不協和な音が出現せずに即興は成立しやすいと思われます。